

# 経験の受身をあらわす HAVE 構文について

村 上 丘

## On the passive HAVE construction

Takashi Murakami

### 0. 序

本稿の目的は、いわゆる「経験の受身」をあらわす HAVE 構文の意味的・統語的特性を記述し、この構文に対応する関係網を規定することにある。第1節においては、特に単純受動構文と比較しながら、HAVE 構文の情報構造上の特徴を考察する。第2節においては、対応する単純受動構文と HAVE 構文との統語的関連性をどのように表示するか、という問題にふれる。第3節においては、「被害の受身」をあらわす GET 構文と HAVE 構文との意味的関連性をどのようにあらわすか、という問題をつかう。第4節においては、対応する単純受動構文のあらわす命題が、have の主語に何某かの影響をあたえていることをこの構文はしめすという事実を、どのように意味的に規定するか、という問題をつかう。第5節においては、have の目的語のあとにくる動詞の過去分詞形が、to (be) でマークされない現象をどのように説明するか、という問題を考察する。第6節においては、主語名詞句と目的語のなかの所有格代名詞との同一指示性の表示方法をつかう。第7節においては、第2節から第6節までの考察にもとづき、HAVE 構文に対応する関係網を提案する。第8節、第9-10節においては、それぞれ提案された関係網の利点、予測力についてのべる。第11-13節においては、過去分詞形が目的語のあとにこない HAVE 構文について考察する。

本稿の考察の対象となる HAVE 構文は、およそ、Dieterich (1975) が経験者 have 構文 ("experienter" have construction) とよんだものに相応する。ただ Dieterich は、(1) のように have のあとに不定冠詞でマークされた目的語がくる例のみをかかげている。

- (1) a. John had a leg broken.  
b. John had a tooth missing.

しかし、本稿では (2) のように、①主語と同一指示的な所有格代名詞が目的語の位置にくる、②目的語のあとに動詞の過去分詞形がくる、という条件をみたした構文を主体に考察する。

- (2) a. The pilot had his plane hijacked.  
b. The soldier had his left leg amputated.  
(Hornby, 1976, p. 75)

なぜなら、その方が、HAVE 構文の意味構造をより如実に反映した統語構造であるとおもわれるからである。実際 (1) の例にしても、主語と目的語との所有関係——この場合は譲渡不可所有——は明白であり、何らかの方法でその関係を記述しなくてはならないのは、いうまでもない。

### 1. HAVE 構文の情報構造

文頭の位置をしめる言語要素は主題 (theme) とよばれ、話し手の話題に対する方向づけを指示する。話し手である人間は、自分自身もふくめて人間に関心があるので、動作主が主題として主語の位置をしめるのは、一般的な現象である。したがって、(3a) はもっとも無標な構文である。一方、受動構文というのは、動作主以外のものが主語としてえらばれた構文である。その場合動作主は情報上の価値がひくく、表現されない場合の方がおい (安井, 1978)。動作主以外のものを主語として選択している点で、(3b) は上述の一般原則から逸脱し、(3a) より有標であるといえる。他方、HAVE 構文というのは、動作をうける対象をあらわす名詞句が (所有者 + 所有

物]の内部構造をもつとき、所有者を主題化させることによってえられた構文である。動作主以外の言語要素のなかの、さらに一部の要素を抽出している点で、(3c)はいっそう有標化の度合のすすんだ構造であるといえる。

- (3) a. They stole my watch.
- b. My watch was stolen.
- c. I had my watch stolen.

HAVE構文が単純受動構文より有標化の度合がたかいことは、前者の方が後者より生じにくいことを予想させる。これは、経験的な言語事実と一致する。

(3b)のような単純受動構文は、この場合主語名詞句が[所有者+所有物]の構造になっているが、動詞によってあらわされた「行為」の対象は所有物にむけられている。一方、(3c)のような経験の受身をあらわすHAVE構文においては、「行為」が所有物めざしておこなわれたにもかかわらず、所有者は所有物を媒介として「行為」の影響をうけたことが言明されている。換言すれば、(3c)は、(3b)によってあらわされた命題とその命題内の所有者との関係に焦点をあてた表現なのである。このような主題の選択における相違はあるものの、(3b)と(3c)は、ともにある「行為」が「所有物」にふりかかったという命題を含有する点では、意味的に一致している。

## 2. 単純受動構文とHAVE構文

単純受動構文とHAVE構文との意味的な平行性をうらづける統語的論拠としては、つぎのような事実があげられる。第1に、それぞれの構文において「行為」をあらわす動詞には、ともに、過去分詞の形態素が付与される。第2に、byをともなった前置詞句を、それぞれの構文に後続させることができる。

- (4) a. My beard was trimmed (by the barber).
  - b. I had my beard trimmed (by the barber).
- (Celce-Murcia, 1983, p. 481)

第3に、単純受動構文の表層主語とHAVE構文との表層目的語とが、規則的に対応する。

Perlmutter & Postal (1977)は、受動構文を普遍的に定式化する方策を提唱した。それにしたがえば、受動構文に対応する関係網は、直接目的語から主語への昇格規則を含有する。この提案にしたがえば、(4a)と(4b)が受動構文であるという事実は、それらに対応する関係網がいずれも直接目的語から主語への昇格規則をふくむことによって表示されることになる。

ところで、本稿の考察の対象であるHAVE構文は、使役と受身の解釈ができる点で、潜在的に両義的である。たとえば、(4b)の文は、(by the barber)の部分(when I got too close to the lawn mower)にかえれば、より受身として解釈されやすくなるだろう。HAVE構文の解釈は表層主語側に主体的な意図があるかないかにかかっている。すなわち、表層主語が、当面する事態に対し、主体的にはたらきかける程度がたかければ、そのHAVE構文は使役の解釈をうける。一方、表層主語が、みずからはたらきかけることがなく、当面する事態を甘受するだけならば、そのHAVE構文は受身の解釈をうける(cf. 宮田, 1970, p. 49)。

## 3. 被害受身構文とHAVE構文

Lakoff (1971)は(5a)のようなgetをふくんだ被害受身構文に対する基底構造として(5b)を提案する。

- (5) a. John got killed.
- b. [John got [ $\Delta$  kill John]]

getは、つぎの2文がしめすようにhaveときわめて同義な文を構成する。

- (6) a. John got his dishes washed.
- b. John had his dishes washed.

(6a)と(6b)は、ともに、使役と受身の意味に解釈される可能性があり両義的である。このような両義性は文

脈によって決定されるので、基底構造によってその差異を明示する必要はないとおもわれる。しかし、get も have も両義性をゆるすという事実は、その構造上の類似性をしめしているとかんがえられる。ここで、(5a)における get と (6a) における get とを、同様にあつかうことが可能であるという仮定をたててみよう。なぜなら、被害受身構文も経験の受身構文も、ともに、動詞によってあらわされた「行為」に対する主語名詞句の心理的態度を表明する文であるからである。すると、(6a) と (6b) は、それぞれ、つぎのような基底構造と関連づけられることになる。

- (7) a. [John get [ $\Delta$  wash his dishes]]  
b. [John have [ $\Delta$  wash his dishes]]

上記の構造は、使役と受身をあらわす動詞 get / have が 2 項述語であり、一方の項が能動文に対応する命題であることを表示している。

#### 4. 情動動詞構文と HAVE 構文

Quirk et. al. (1972) は、(8a) の文があらわす意味のひとつとして (8b) を、Celce-Murcia (1983) は、(9a) の解釈として (9b) を、かかげている。

- (8) a. John had a book stolen from the library.  
b. John suffered the loss of a book from the library.  
(9) a. Alice had her purse snatched.  
b. The purse snatching happened to Alice. It was beyond her control.

上記の b 文に共通しているのは、命題と項とを 2 項述語 (suffer, happen to) が連結している点である。もし b 文のパラフレーズが a 文の意味構造をただしく反映しているとする、have は 2 項述語とみなされることになる。この案は、前節においてのべた、Lakoff の get 被害受身構文の分析から推定した HAVE 構文の意味構造に合致する。

動詞 suffer, happen to の意味構造から、2 項述語 HAVE のしただげる項のひとつは命題を内包する〈主題格〉であり、もうひとつは〈経験者〉である、と帰結する。このような格のくみあわせをゆるす述語には、情動動詞 (verbs of emotion) がある (cf. McCawley, 1976)。情動動詞は、たとえば、つぎのような構文にあらわれる。

- (10) a. Polish jokes don't amuse Kowalski.  
b. John's loud stereo annoys his neighbors.

このたぐいの動詞には、ほかに、disturb, irritate, excite, thrill, disgust, bother, surprise などがある。上記の例から明白のように、〈主題格〉〈経験者〉のふたつの項をしただげる情動動詞構文においては、前者が主語、後者が直接目的語として具現する。もし、このような情動動詞の統語型が一般的なものであるならば、have 構文におけるふたつの項も同様に、〈主題格〉が主語、〈経験者〉が直接目的語として規定できるはずである (cf. Otsuka, 1981)。そこで HAVE 構文は、それに対応する単純受動構文をあらわす命題を始発主語、表層主語をあらわす項を始発直接目的語、とする関係網に対応すると結論する。

have の機能は、〈主題格〉をあらわす命題に対し、〈経験者〉が間接的に関与していることを表明することにある (cf. 益岡, 1979)。その関与がどのようなものかは文脈が決定する意味で、have は比較的無色の意味内容をもっている。このように、have の意味を特定化できないという事実は、X have Y. という構文にみられる have の多義性を継承したものといえよう。一方、おなじく〈主題格〉と〈経験者〉の項をしただげる情動動詞は、have よりその意味が特定のである。すなわち、情動動詞は、〈主題格〉によって〈経験者〉の心理がどのように変化したか、その結果までを意味内容としてふくんでいる。

Celce-Murcia (1983, p. 451) は、情動動詞が受動構文としてあらわれやすいことを示唆しているが、その理由はのべていない。これは、第 1 章でのべた情報構造の要請によるものとおもわれる。そこにおいては、人間

をあらわすものは、文頭の位置をしめやすいことを確認した。情動動詞構文は受身にした場合、〈経験者〉が主題化され文頭の位置をしめるので、一般的な配列型に合致する。換言すれば、(11)のような構文は、(10)にくらべ、受身を含有するという点からすれば統語的に有標だが、情報構造上は無標な構文といえる。

- (11) a. Kowalski is not amused by Polish jokes.  
b. John's neighbors are annoyed by his loud stereo.

逆に(10)は、統語的には無標だが、情報構造上は有標であり、〈経験者〉を主題化させる規則をうけやすい構造といえる。このことは、本稿の関心の中心であるHAVE構文にもあてはまるとおもわれる。

## 5. 使役/知覚構文とHAVE構文

表層構造  $[NP_1 V_1 NP_2 V_2]$  は、英語においてきわめて安定した文型である。この文型において  $V_1$  が expect, believe, want などの場合、 $NP_2$  と  $V_2$  とのあいだには *to* が介在するのが一般的であり、その構文は対格つき不定詞構文 (the accusative and infinitive construction) とよばれる。しかし、 $V_1$  が知覚動詞、使役動詞 (もしくは help, know など) の場合、*to* は介在しない。これは、 $V_2$  が過去分詞形の場合も同様である。

- (12) a. John expects Mary to be examined by the doctor.  
b. John believes himself to be hated by Mary.  
(13) a. He heard his name called.  
b. He felt his eyes dazzled.  
c. You should make your views known.

(主文に受身が適用した場合、She was seen to dance. のように *to* が顕現するが、これは主文の受身に誘発された現象であり、補文の受身をつあつかっている当面の考察には影響しない。) このような *to* (be) の生起は、個々の動詞の個別的な特性によるとするより、特定のグループの動詞に適用される規則の相違とかがえる方が、一般的な記述ができるとおもわれる。

ここで、上昇規則 (Raising) を含有する関係網に対応する構文においては、 $V_2$  は *to* でマークされ、節結合 (Clause Union) を含有する関係網に対応する構文においては、 $V_2$  は  $\emptyset$  でマークされる、という仮説をたてよう。上昇規則は、補文のなかの一名詞句を主文の要素にくりあげる。その際、補文の述語は補文内にとどまる。*to* の介在がそれを明示する。一方、節結合によって、補文内のすべての要素は主文と直接、何らかの文法関係をもつようになる。補文内の述語もしかりである。補文の述語の主文に対する直接性・密接性が  $\emptyset$  マーキングによってしめされる、とかがえるわけである。この仮定にしたがえば、HAVE構文において目的語のあとにくる過去分詞形が *to* (be) でマークされない現象は、対応する関係網が節結合を含有していることにその理由をもとめられる。また、節結合のひきがねになりうる点において、have と知覚動詞・使役動詞との相通性も捕捉できるわけである。

このようにかんがえると、(14 a) から (14 b) を派生するために必要であるとされた *to-be* 削除規則は、不必要になるとかんがえられる。

- (14) a. Mort found the chair to be comfortable.  
b. Mort found the chair comfortable.

なぜなら、(14 a) は上昇規則を包含する関係網に、(14 b) は節結合を包含する関係網に、それぞれ関連づけられるからである。

## 6. HAVE構文と余剰的代名詞

(15) のような構文において、目的語の位置にくる所有格代名詞は、つねに、主語名詞句と同一指示的でなければならない。このことから Bresnan (1983) は、前者を後者の束縛照応形とみなしている。

- (15) a. John craned his /\*her neck.  
b. Ann lost her /\*his temper.  
c. Max cleared his /\*her throat.

HAVE 構文も、それが単純受動構文と関連づけられるかぎり、通例、主語名詞句と同一指示的な要素が目的語の位置にあらわれる。( (2) を (16) として再掲する。 )

- (16) a. The pilot had his plane hijacked.  
b. The soldier had his left left leg amputated.

そこで、HAVE 構文における目的語の位置をしめる所有格代名詞を、主語名詞句に束縛された照応形とみなすことにしよう。

つぎのような資料から、所有格代名詞ばかりでなく再帰代名詞もまた、束縛照応形とみなしてよいとおもわれる。

- (17) a. John shaved himself /\*herself.  
b. John saw a picture of himself /\*herself in the post office.

(17 a) は再帰代名詞が単独で目的語の位置をしめている例、(17 b) はいわゆる絵画名詞 (picture noun phrase) に再帰代名詞が後続している例である。ところで、HAVE 構文においても、主語と同一指示的な名詞が再帰代名詞としてあらわれる場合がある。

- (18) a. He'd have himself crowned Emperor.  
(F. B. "REBOUND")  
b. He had most records of himself destroyed after his rise to power.  
(F. B. "ENTITY TRAP")

(18 a) は再帰代名詞が単独で have に後続している例、(18 b) は名詞句内で再帰代名詞が絵画名詞のあとにあらわれている例である。

Bell (1983) は、(17 a) のような再帰代名詞をふくんだ構文に対応する関係網を、照応リンクをもちいて表示している。関係網のなかで、ふたつの名詞句 X, Y を結合した照応リンクは、それら X, Y の同一指示性を保証する。もし、束縛照応現象一般を表示するのに、照応リンクをもちいることが可能だとすれば、(16), (18) のような HAVE 構文に対応する関係網は、一律に、表層主語と表層目的語とをむすぶ照応リンクをふくむことになる。

なお、(15), (16) に対応する関係網において、それぞれの表層主語名詞句と照応リンクでむすばれるのは、目的語の「なか」の所有格代名詞である。このような所有格代名詞の独自性、所有物をあらわす名詞との分離性をしめすため、それぞれの文法関係を関係網のなかで明示することも必要である (cf. Murakami, 1983)。ここでは、所有格代名詞としてあらわれる名詞の文法関係を「所有者」、所有物をあらわす名詞の文法関係を「主要部」とすることにしよう。(それぞれを Poss, H と略す。)

## 7. HAVE 構文に対応する関係網

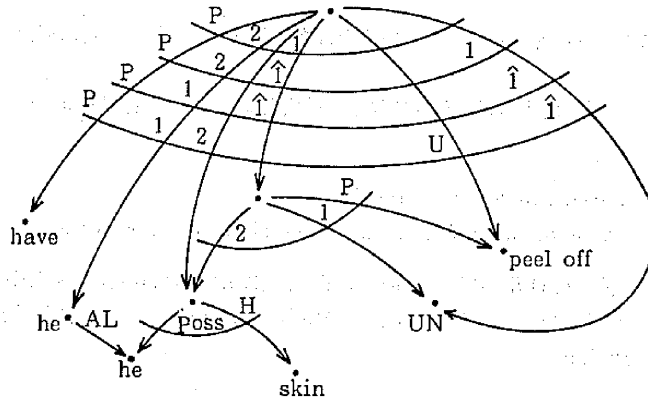
これまで、HAVE 構文に対応する関係網 (便宜上、これを HRN とよぼう) に課せられた条件を考察してきた。ここで、これまでに得られた結論を総括しておこう。

- ① HRN の主動詞 have は 2 項述語である。
- ② HRN の主文の始発文法関係は、1 と 2 である。
- ③ 始発 2 をあらわす名詞句は、最終 1 である。
- ④ 始発 1 をあらわす名詞句は、対応する単純受動文の命題をあらわす補文である。
- ⑤ HRN は、2 から 1 への昇格規則を含有する。
- ⑥ HRN は、最終 1 の名詞句をふくむ (これは音形をとまなわないことの方がよい)。

- ⑦ HRNは、節結合を含有する。
- ⑧ 最終2の名詞句は、PossとHの文法関係をもつ名詞から構成される。
- ⑨ 最終1とPossとは、照応リンクが結合する。

上記の条件を考慮にいとると、たとえば、(20) にみられるHAVE構文に対応する関係網は、(21) のようなものと想定される。

- (20) He had his skin peeled off.  
(F. B. "PUPPET SHOW")
- (21)



関係網(21)は、つぎのような事実を表示する。UNは無指定の名詞句をあらわす。始発層においては、[UN peel off his skin]という命題が1, heが2, 心理的關係概念をあらわすhaveがPの文法関係を有する。このhaveは、すでにみたように、suffer, happen toなどに意味的に対応する。第2層においては、UNが文法関係継承の法則にしたがって上昇し、上昇先で1の文法関係をもつ。補文全体は、失業者の法則にしたがって、失業者の文法関係をもつ。第2層から3層にかけては、2から1への昇格規則が適用する。上昇名詞句UNは、層内唯一性の法則に抵触しないよう、失業者の文法関係をもつ。最終層では節結合が適用する。補文の述語peel offは結合(U)の文法関係をもち、補文の2であるhis skinは主文に対し2の文法関係をもつ。これと同時に、補文全体が主文に対してもっていた文法関係(↑)は消滅する。

なお、この関係網の言語要素を線状化するためには、それらの言語要素の最終文法関係の情報に感応するつぎのような規則が必要となるだろう。

- (22) a.  $1 \rightarrow P \rightarrow 2 \rightarrow U \rightarrow \hat{1}$   
b.  $\text{Poss} \rightarrow H$

(→は、先行関係をあらわすものとする。)

## 8. 関係網の利点

前節で提案した関係網(21)の利点は、つぎのとおりである。

- ① 始発構造において、HAVE構文の意味構造を反映させることができる。
- ② 2から1の昇格規則を含有すると想定することによって、補文の動詞に受身形態素が付与されることを予測可能にする。
- ③ 最終層で↑の文法関係をもつ名詞句UNを想定した。これによって、byをともなった前置詞句をHAVE構文に後続させることが可能なことを予測する。(第2節(4b)参照)
- ④ 単純受動構文も2から1への昇格規則を含有すると想定することによって、HAVE構文と単純構文とがともにその動詞を受身形態素でマークされるという共通の現象を説明できる。

- ⑤ 単純受動構文も↑の名詞句をふくむと想定することによって、HAVE構文と単純受動構文がともに[by + 名詞句]を後続させうる、という共通の現象を説明できる。
- ⑥ 単純受動文に対応する平叙文を補文とする複文構造をHAVE構文にあたえることによって、単純受動文の表層主語とHAVE構文との表層目的語とが、規則的に対応する現象を説明できる。
- ⑦ 被害受身構文と類似した構造をあたえることによって、被害受身構文とHAVE構文との意味的・統語的平行性を抽出できる。
- ⑧ HAVE構文における目的語のなかの所有格代名詞を束縛照応形とみなすことによって、主語との同一指示性を保証できる。
- ⑨ 節結合を包含する関係網に対応する構文においては、その補文がtoでマークされないかと仮定した。これによって、使役動詞・知覚動詞・haveのともなう補文の動詞がtoでマークされない現象を、統一的に説明することができる。

## 9. 関係網の予測力(1)

enter, quit, give upなどの動詞は、主語の自律的な動作をあらわし、目的語は動詞のあらわす動作を直接的にうけない。このような動詞群は、受動構文をとらない。

- (23) a. John entered the University of Hawai in 1960.  
b. \*The University of Hawai was entered by John in 1960.
- (24) a. John gave up Mary.  
b. \*Mary was given up by John.

このような点に注目し、久野(1983, p. 202)は、つぎのような一般性を抽出する。

- (25) 英語において、他動詞でも、それが表わす動作・状態が、目的語を直接的に動作・状態のパーティシパントにしないようなものは、受身形として用いられない。

知覚動詞および使役動詞構文は、HAVE構文と同様、節結合を含有するという共通点をもつ。ところで、haveがこれらの動詞とことなるのは、主文における受身規則の適用に関してである。

- (26) a. I was never let to go.  
b. I was made to go.
- (27) a. \*The pilot's plane was had hijacked (by him).  
b. \*The soldier's left leg was had amputated (by him).

(26), (27)の文法性の差異は、つぎのように説明できるかもしれない。使役構文[NP<sub>1</sub> V<sub>1</sub> NP<sub>2</sub> V<sub>2</sub>]において、NP<sub>1</sub>は使役を誘発する者(causer)であり、NP<sub>2</sub>は使役の対象となる者(causee)である。NP<sub>2</sub>は使役という「行為」に直接関与するので、(25)の条件に抵触せず、受身が可能ということになる。一方、HAVE構文[NP<sub>1</sub> V<sub>1</sub> NP<sub>2</sub> V<sub>2</sub>]は、命題[NP<sub>2</sub> V<sub>2</sub>]によってあらわされた内容が、間接的・心理的にNP<sub>1</sub>に関与することを表明した文である。したがって、そのような構文は条件(25)によって受身になることはできない。[知覚動詞の目的語は、知覚という行為に直接関与しないにもかかわらず、受身によって主語になる。この点については久野(1983)参照。]

ところで、受身に関する制約(25)に依拠することなく、関係網一般に課せられた普遍法則によっても、(27)の非文を説明することができるかもしれない。関係網(21)において、名詞句his skinは最終2の文法関係になっている。受身というのは2を1に昇格させる規則であるから、最終2はさらに1になることができるはずである。このような昇格をふくんだ関係網をWとよぶことにしよう。Wはふたつの1への昇格を包含している。名詞句heは第2層から第3層にかけて2から1へ昇格し、名詞句his skinは第4層から最終層にかけて昇格している。このようなWの構造は、普遍法則のひとつである1への昇格独占の法則に抵触する。したがって、HAVE構文における表層目的語を受身によって主語化した文は、適切な関係網と関連づけることができず、(27)のような文の非文法性を自動的に説明することができる。

## 10. 関係網の予測力 (2)

Bresnan (1982, p. 160) は, (28 a) には「経験の受身」「完了」「使役」の3とおりの解釈があり多義的であるが, (28 b) には「完了」の解釈しかない, という観察をしめしている。

- (28) a. John had his house painted.  
b. John had his neck craned.

すなわち, 経験の受身をあらわすHAVE構文の解釈ができないという観点にたてば, (28 b) は\*がつけられるべき構造である。ここで, なぜ (28 b) に経験の受身の解釈がないかをかんがえてみよう。

(28 b) に対応する関係網の始発構造は, 大略, つぎのようにしめされる。

- (29) [John have [ $\Delta$  crane his neck]]

①補文の主語である $\Delta$ と補文の直接目的語の位置にある所有格代名詞とは束縛照応の関係にあり, ②主文の最終主語Johnと補文の目的語his neckとは束縛照応の関係にあることから,  $\Delta$ はJohnと同一指示的であると帰結される。とすると, (29) におけるJohn,  $\Delta$ , hisのみつの名詞はすべて同一指示的であり, その意味は, Johnの自己完結的な行為 (John craned his neck.) とJohn自身との心理的關係を陳述することになる。しかし, これは, 意味的に自然ではない。みずからに関連のあるできごととみずからのかかわりをのべるのが, HAVE構文の機能である。番3者がみずからにほどこした行為は, みずからにかかわる事態として客体化しやすい。しかし, 第3者の関与しないみずからの行為は, みずからの心理的関与の対象とするほどには客体化しにくい。

また, (28 b) が経験の受身であるならば, 対応する単純受動構文があるはずである。なぜなら, HAVE構文は対応する単純受動構文の能動文を補文にもっているからである。しかし, それは下例がしめすように非文である。

- (30) a. He craned his neck.  
b. \*His neck was craned (by him).

単独で受動構文をとれない構文を補文にもつHAVE構文の関係網は, 2から1への昇格規則を含有することができない。このように, 意味的・統語的理由から, (28 b) が経験の受身をあらわすHAVE構文とみなすことができないことを説明できるとおもわれる。

## 11. 受身形態素をともしないHAVE構文 (1)

これまで, HAVE構文という名称のもとで, [NP have [Poss N] X]のなかのXが, 動詞の過去分詞形をとる構文のみを考察してきた。ところで, Xの位置には他のさまざまな言語要素がくることができ。

- (31) a. He made himself a rope-belt to keep it with him and yet have his hands free.  
(F. B. "ARENA")  
b. Whenever I leave the house I dye my hair. At home, however, I prefer to have it  
[= my hair] its natural color, which is green.  
(F. B. "BRIHGT BEARD")  
c. It had struck his sense of humor to have his new life begin at forty to the minutes.  
(F. B. "NIGHTMARE IN YELLOW")

(31) は, Xの位置に形容詞, 述語的名詞句, 動詞がそれぞれしめている例である。このような場合のHAVE構文は, 受身形態素をともしない言語要素をふくまないで, 「経験の受身」とよぶことは適当でない。しかし, いずれも, ひろい意味で主語名詞句の「経験」をあらわしているとかんがえられるので, これまでHAVE構文にあたえたのと類似した構造をもつものとおもわれる。すなわち, (31) のHAVE構文は, 2項述語を主動詞とし, 述語相当語を補文動詞とする関係網に関連づけられるとおもわれる。ところで, 経験の受身をあらわすHAVE構文に対応する関係網においては, <経験者>が始発2, <主題格>が始発1であった。しかし, そのような始発構造を(31)に対応する関係網にあたえることはできないとおもわれる。なぜなら, ①始発2をになう経験者名詞句が1



に昇格したという統語的根拠がない。②<主語格>をあらわす命題。— (31 a) においては[his hands free]—を始発1にすることによってえられる統語的利点がない，からである。したがって，(31)に対応する関係網の始発構造は，<経験者>が始発1，<主語格>が始発2，と想定する。この構造は，これまで見たHAVE構文の構造とちょうど逆である。しかし，haveの意味が，<経験者>の<主語格>への間接的な関与をあらわすことをおもえば，その規定は不自然ではないとおもわれる。(31)の例におけるXの位置のtoの不在は，対応する関係網の節結合によって説明されることになるだろう。このような構造は，(32)のような知覚/使役構文にも，どのみち，あたえなくてはならない一般的なものである。

- (32) a. The mud made walking difficult.  
b. They made Newton President of the Royal Society.  
c. We felt the house shake.

## 12. 受身形態素をともなわないHAVE構文(2)

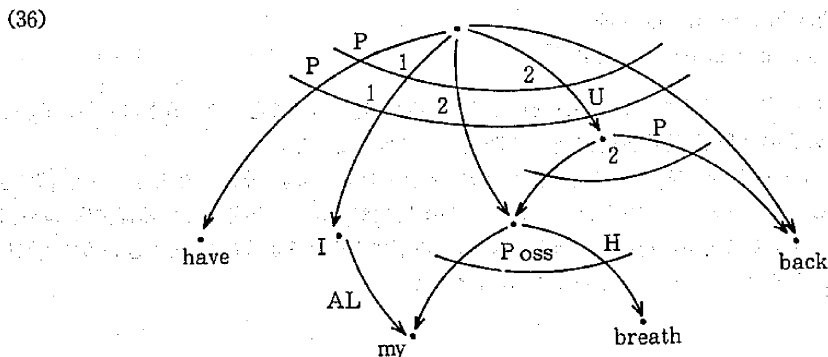
letとhaveをともなった構文は，補文の動詞がくるはずの位置に，方向をあらわす副詞・前置詞句をゆるす点で共通している。

- (33) a. The warden let the prisoner out.  
b. The pickets would not let them through.  
c. He let himself quietly out (of) the bedroom.  
d. They let him down on a rope.  
(34) a. Ma already had her head through the flap of the tent.  
(F. B. "NOTHING SIRIUS")  
b. I had my breath back and started climbing again.  
(F. B. "THE LITTLE LAMB")  
c. He didn't want to have his teeth out. (LDCE)

out (of), through, down, backなどの副詞・前置詞句には，いずれも，叙述的用法がある。このことは，これらの要素が述語としての性格をそなえていることをしめしている。

- (35) a. The tide is out.  
b. My work is through.  
c. The sun is down.  
d. I'll be back soon.

したがって，これらの副詞・前置詞句が補文のなかで述語の文法関係をになうと仮定すると，たとえば(34 b)は，つぎのような関係網と対応するとかんがえられる。



ただし、このようにかんがえることは、まったく問題がないわけではない。第9節において、HAVE構文に受身がかからない理由として、1への昇格独占の法則を援用した説明を提出した。すなわち、(27) [(37)として再掲]の非文法性は、対応する関係網がふたつの1への昇格をふくむ事実に基づき、とした。

- (37) a. \*The pilot's plane was had hijacked (by him).  
b. \*The soldier's left leg was had amputated (by him).

ところで、(36)のような関係網は1への昇格を含有していないので、さらに受身をゆるしてしまう可能性がある。しかし、(34)に対応する受動構文は非文である。

- (38) a. \*Ma's head was had through the flap of the tent.  
b. \*My breath was had back.

したがって、(38)の非文を説明する別の方策が必要になる。とすれば、(37)と(38)の非文法性を別々の説明原理にもとめなければならなくなり、あきらかに一般性を欠く。(37)と(38)の非文法性は、久野の提案した制約(25)によってなら統一的説明が可能であるが、いずれにしても、HAVE構文の受身不可能性の説明は、なお精密化する必要があるとおもわれる。

### 13. 受身形態素をともしないHAVE構文(3)

have構文は、場所をあらわす前置詞句を包含することもできるが、その場合、慣用的な意味に解釈されることが多い。

- (39) a. He had his hands in the clouds.  
b. I had my heart in my boots.  
c. I had my heart in my mouth.  
d. You need to have your wits about you.  
e. He always has his ear to the ground.

(39)の文は、つぎのふたつの点で、(40)の文と区別しなければならない。

- (40) a. He has a house in the country.  
b. I have a pen in my hand.

①(40)の文の前置詞句は削除可能だが、(39)の前置詞句は文にとって必須要素である。②(40)の目的語は不定だが(39)の目的語は特定のである。このような点から、(39)と(40)は別な構造をもつとかんがえられる。(40)の文に対応する関係網の始発構造は、存在構文であるとかんがえられるが、本稿ではそれにはふれない。(39)の文は、いくつかの点で、第11-12節でみたHAVE構文との共通項がある。まず第1に、主語と同一指示的所有格代名詞が目的語の位置にあること、第2に、叙述的に機能する前置詞句をしがてらえていること、である。

- (41) a. The key is in the lock.  
b. Your hat is on the table.

したがって、(39)は補文構造をもち、(36)に近似した関係網に対応させることができるとおもわれる。もっとも、この場合も、(39)の文の受身不可能性の説明という問題がのこされている。

これまで、[NP have [Poss N] X]の文型において、NPとPossが同一指示的なとき、Xの位置にさまざまな言語要素がくることができるとを観察した。そして、その構造はhaveを2項述語とする補文構造の関係網に関連づけられる可能性があることを示唆した。動詞wearも、以下にみられるようにhaveときわめて類似したふるまいをしめすので、あるいは、同様に処理できるかもしれない。

- (42) She wears her hair { up/down to her waist.  
long/short.  
waved/parted in the middle.

また、いわゆる付帯状況をあらわすWITH構文もHAVE構文ときわめて類似した性質をしめす。すなわち、[with [Poss N] X] という構文において、Possは先行（もしくは後行）する文の特定の名詞句に束縛されており、Xの位置にさまざまな要素がくることをゆるす。

- (43) He stood with { his hat off.  
his mouth open.  
his eyes closed.  
his hands in his pocket.

haveとwithとの統語的・意味的平行性は、つぎのような例から、ゆるがないとおもわれる。

- (44) a. The girl has blue eyes.  
b. the girl with blue eyes.  
(45) a. The table has a scratch on it.  
b. the table with a scratch on it.

したがって、すでに提案したHAVE構文と類似した関係網が、(43)に対応するものとおもわれる。しかしこれらの構文の分析にあたっては、さらに考察をふかめる必要があるだろう。

#### 参考文献

1. Bell, Sarah J. (1983) "Advancements and Ascentions in Cebuano." In D. Perlmutter (ed.) *Studies in Relational Grammar*. 1. The University of Chicago Press. 143-218.
2. Block, Robert (ed.) (1977) *The Best of Fredric Brown*. Ballantine Books. New York.
3. Bresnan, Joan. (1982) "Polyadicity." In J. Bresnan (ed.) *The Mental Representation of Grammatical Relations*. MIT Press. 149-172.
4. Brown, Fredric. (1961) *Nightmares and Geezenstacks*. Bantam Books. New York.
5. Celce-Murcia, Maria, Marianne. (1983) *The Grammar Book*. Newbury House Publishers, Inc. Rowley.
6. Dieterich, Thomas G. (1975) "Causative Have." *CLS*, 11. 165-176.
7. Hornby, A. S. (1976) *Guide to Patterns and Usage in English*. Oxford U. P. London.
8. 久野暉 (1983) 『新日本文法研究』(第12章 中立受身文と被害受身文) 大修館書店.
9. Lakoff, Robin. (1971) "Passive resistance." *CLS*, 7.
10. 益岡隆志 (1979) 「日本語の経験的間接関与構文と英語のhave構文について」『英語と日本語と』345-358. くろしお出版.
11. McCawley, Noriko A. (1976) "On experiencer causatives." In S. Shibatani (ed.) *Syntax and Semantics*. Vol. 6. 181-203.
12. 宮田幸一 (1970) 『教壇の英文法(改訂版)』研究社.
13. Murakami, Takashi. (1983) "The unaccusative hypothesis and possessor ascension." *DAL*. XVI. 131-139.
14. Otsuka, Tatsuo. (1980) "Passivization in Japanese." *DAL*. XIII. 121-135.
15. Perlmutter, D. M. and P. M. Postal. (1977) "Toward a universal characterization of passivization." *BLS*. 3.

16. Quirk R. et. al. (1972) *A Grammar of Contemporary English*. Longman.
17. 安井稔 (1978) 『新しい聞き手の文法』大修館。

(1985年1月16日受理)